

多様な森



支笏湖畔に広がる混交林

支笏カルデラ外輪山の森

支笏湖を囲む山地は、豊かな森林に覆われている。林相は湖岸の低地ではエゾマツ・トドマツの針葉樹にミズナラやハルニレなどの広葉樹を交えた混交林が主体で、上部では針葉樹林に移行する。

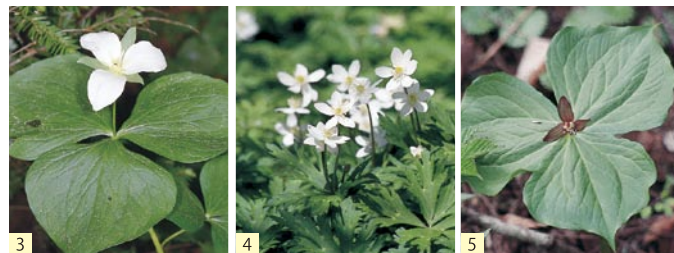
噴火が早く終わった風不死岳はエゾマツ、トドマツなどの濃い緑に覆われているが、17世紀後半から現在まで噴火活動が続いている樽前山では、森林は標高約600m以下にしかない。

早春の林床植物

冬の長い北海道では、春が一度にやってくる。雪が消えるのを待ちきれないように、植物たちは一斉に目覚める。「春植物」と呼ばれる草は、木の葉が開くより早く、明るい林の中に次々に花を咲かせ、種子を結び、木の葉が開いて林内が暗くなる時期には地上部は消えてゆく。英語ではスプリング・エフェメラルという。「春のはかないもの」という意味である。成長期間が短い春植物は、芽が出てから花が咲くまでに時間のかかるものが多い。カタクリは8年、オオバノエンレイソウは十数年もかかる。

美笹の巨木林

支笏湖周辺の森は、昭和29年(1954)の台風で大きな被害を受けた。しかし、西岸の美笹周辺には、いまもハルニレ、カツラ、ミズナラ、シナノキ、センノキなど広葉樹の大木が多く、「巨木の森」と呼ばれている。



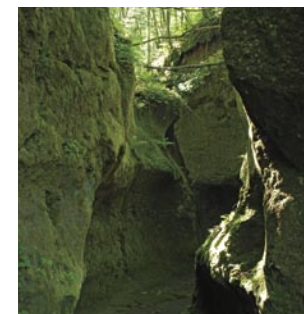
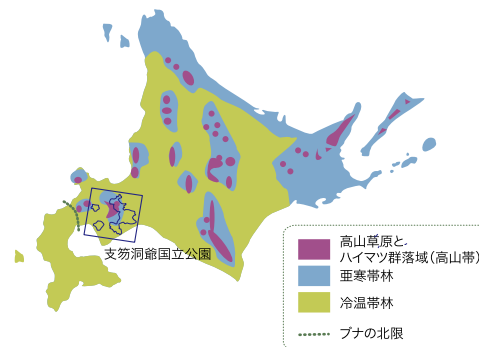
- 1 エゾエンゴサク
- 2 カタクリ
- 3 オオバノエンレイソウ
- 4 ニリンソウ
- 5 エンレイソウ
- 6 フクジュソウ



北と南の森林が交わる北海道

北海道では、南部の渡島半島までは本州以南に広く分布するブナ林が見られる。それより北ではブナ林はなくなるが、低地にはハルニレ、シナノキ、カツラ、カンバ類など本州の山地と共通する多くの広葉樹と、本州にはないエゾマツ、トドマツなどの針葉樹が生育する混交林が広く分布している。これは、北海道が気候的に冷温帯と亜寒帯の境い目にあり、両方の森林の植物が入り混じっているためである。このような森林の構成は、本州の森林よりも、むしろ北アメリカ東岸や沿海州の森林と似たところがある。

北海道の森林タイプ



苔の洞門

風不死岳の西麓にある。樽前山から流出した火山岩の割れ目が浸食されてできた狭い流れ谷で、深さ最大で約10m、幅3m、延長約400mである。両側の岩壁にエビゴケ、オオホウキゴケなど約30種類のコケが密生している。これは温度や湿度、日照条件などがコケの生育に適しているためで、成立には長い時間がかかっている。崩壊の危険があるため谷の内部には入れないが、入り口の観覧台から見学できる。

Column

噴火による自然の破壊と再生



樽前山(上)と風不死岳(下)の植生
火山活動が早く終わった風不死岳は、山頂部まで森林に覆われている。

火山の噴火は、周辺の森林に大きな影響を与える。火山灰や軽石が積もったり、火砕流に巻き込まれたところでは、樹木が枯死してしまう。火口付近では地温も高くなるので、被害はさらに大きくなる。植生の回復は地温の低下を待って草やコケが生えるところから出発しなければならず、遷移が進んで森林が再び成り立つまでには長い時間がかかる。一方、火口より距離があり、かぶった噴出物が少なければ、植物は自力で再び芽を出し、森林は比較的短時間で元に近い状態に戻る。

いま、樽前山や有珠山の周辺では、噴火の影響の程度に応じて、回復の途中のさまざまな段階にある森林が見られる。